

令和8年度 第1回 都市計画サロン 報告

日時：令和8年7月24日（金）

参加者：13名

演題：「障害から考える包摂都市 ―ひとりから始めるみんなのインフラ―」

講師：羽野暁氏（九州大学 芸術工学研究院 未来共生デザイン部門 准教授）

講演内容：

都市のインフラについて、人の人生、生き方を支える舞台になる（インクルーシブ）という理念を軸に、価値観を広げる活動をしている。

障害には個人モデルと社会モデルがある。障害の社会モデルでは4種類のバリアがあり、特に物理的バリアについてはこれまでも土木、建築で頑張ってきてバリアをなくす取り組みがされている。そのほかにも情報のバリア、制度的バリア、心理的バリアがあり、これらはつながっている。これらをどう低減していくかがインクルージョンを進めていくカギになると考えている。国連は当事者参加のスローガンを示しており、当事者が主体的に参加する共創が大事である。

一つ目は鹿児島県姶良市のオープンスペースのデザインの事例である。山田橋を架けかえる際に、旧橋を撤去したスペースをオープンスペースとして整備した。橋を架けかえたあとの残地をオープンスペースとして整備する事例はあまりなく珍しい。橋を架けかえた際の生活景の喪失感を低減できないかという考えをもって取り組んだ。経緯としては財源的にも古い橋を残すことは難しかったため、インフラを擬人化（山田橋君）した歴史紙芝居を作成し披露したところ、小学生から山田橋君に照明を付けてあげたいと意見があった。新しく照明をつけるのは難しいこともあり、小学生みんなで山田橋の思い出を灯籠として作成した。そうしたところ非常に多くの人々が来場し、山田橋の思い出を語らう場として大変盛況であった。この事例は回想空間になりうるインフラ（認知症の領域）、

つまり社会的処方、文化的処方としてのインフラとしてなりうると思った事例であった。このようなこともありポケットパークに旧橋の親柱や高欄を残すことになり、新しい場所になじむようにデザインを行った事例である。

次に九州大学に着任してから取り組んできた、らくちんラボにおけるインフラの事例を紹介する。らくちんラボでは様々な分野が横断して加わっており、かつ当事者といっしょに取り組むことを大事にしている。伊都キャンパスの中にもバリアフリー基準以上のものを設置しており、中でも整備中の歩車道境界ブロックが特徴的な事例である。本来歩車道境界ブロックは車いすユーザーにとっては段差をなくしてほしい一方、視覚障害者の方にはこの段差が重要な空間識別情報となっており障害種間でコンフリクトが生じている。このコンフリクトを解決するために新たな歩車道境界ブロックを開発した。他県の事例も実験を行いながら最終的に両者が問題なく通過、識別できるタイプを開発することができた。プロジェクト当初は視覚障害の方から厳しい意見もあったが、当事者共創により物理的コンフリクトと心理的コンフリクトを緩和することができた。

そのほかにもドライブスルー型駐車場や2色覚を基点とした配色方法の開発など当事者参加のもと、より当事者によって使いやすい、求めているインフラを開発、提案を行っている。すべてが平均的な人間は存在しないにもかかわらず平均的な基準でインフラを作ってきたが、国連が提唱するように対象を捉えなおし当事者共創のもとインフラの質を高めてくことが今後必要である。



都市計画サロンの様子

（文責：福岡大学 田部井優也）